2025年8月31日　第二礼拝

説教題「『殺す世界』から『祈る世界』へ」使徒言行録９章1～19節

主任牧師　加藤　誠

「主は言われた。『行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。』」（使徒言行録９：１５）

日本語の「改心」は悪いことをやめて心を入れ替えることを言いますが、「回心」はキリスト教の conversion の造語で、心の向きを神に方向転換する、神に向かって生きる者とされることを言います。例えばアウグスティヌスの回心が有名です。『告白』（紀元 4 世紀）は、赤裸々に自分の弱さ、過ち、葛藤を書き著した本です。アウグスティヌスは「神の前に自分ほどいとわし者はいない」と言います。幼い時から数限りなく嘘をつき、教師や両親をだまし、数限りなく盗みもした。学校では「うまく教師たちをだますほどほめられ」首席になった陰で新入生をいじめた。青年時代には情欲におぼれ、醜い情事の虜となった。そのアウグスティヌスがある時「取りて、読め」という声を聴き聖書を開くと、パウロの言葉に心をとらえられ、神に百八十度心の向きを変えて生き始めるのです。そのアウグスティヌスの回心を導いたパウロの回心物語がこの使徒言行録９章です。

１節の直訳は「サウロはなおも主の弟子たちに対する脅迫と殺害の息を荒々しく吐き出し…」。エルサレムで起こったキリスト教徒への大迫害から逃れた者たちをどこまでも追いかけるサウロの体中から「殺気」が噴き出していたのでしょう。

聖書は、人間が神に造られた最初から「殺害」の息をその心に抱える存在であることを描いています。アダムとエバ、カインとアベルのファミリーが神の祝福を失っていくのは、その心に生まれる「嘘、ごまかし、責任転嫁、嫉妬、憎悪、そして殺意」が原因でした。その点では私たちも同じです。そして、この９章のパウロから見えてくるのは「殺害を神の名で正当化する」人間の最も罪深い姿です。自分がやっていることが「間違っている、危うい」と知りつつ悪事に手を染めるのなら、まだ神に立ち返る可能性があるかもしれない。しかし自分の行動を「神の名で正当化する」場合は自分が神の側にいることを疑わないので、何の忠告も耳に入らないのです。

この９章には「殺そうと」という言葉が三回出てきます。１節はパウロ自身の、23 節 24 節は裏切者パウロに対する、パウロの仲間たちの言葉です。簡単に「殺す」という言葉が出てくる背後に「神の名で正当化された信仰」があります。宗教の最も罪深い姿がここにあります。聖書の律法はユダヤの人々が大切にしてきた神との契約。その律法をないがしろにしたイエスとその弟子たちは神に敵対する憎むべき者であり、生かしておいてはいけない。この「殺す世界」にパウロは生きていました。

しかし「殺す世界」に生きるパウロを神はそのままにすることなく、「祈る世界」

に捕え移していかれます。旧約ではバビロン捕囚という悲しみの捕え移しですが、新約はキリストの恵みへの捕え移しという希望の出来事です。なんとうれしいことでしょうか。そのためにアナニアという弟子が用いられます。アナニアは突然幻の中で「立って、サウロという男を訪ねよ」と命じらて大いに戸惑います。「主よ、あの男は…！」と精一杯の抗弁をしますが、最終的には「行け」という主の言葉に従うのです。アナニアは「殺す世界」とは対極の「祈る世界」に生きていました。「殺す世界」はどこまでも自己を正当化していく世界。それに対して「祈る世界」はいろいろと抗いながらも愛の神に「はい」と従っていく世界です。

この９章の主語は神です。パウロが自らの間違いに気づき、自分の力で生きる方向を変えたのではありません。神が「殺す世界」に生きるパウロを捉え、視力を奪い、誰かの手引きなしには歩くことのできない者とします。パウロは自分の力で視力を取り戻すことができたのではありません。アナニアに手を置いて祈ってもらって視力を取り戻します。そのアナニアも自らの愛と意志でパウロのもとに赴いたのではありません。主から愛の祈りを注がれて、主の愛に押し出されていったのです。18 節「たちまち目からうろこのようなものが落ち」。パウロはこの時、自分自身の力ではなく、他者の愛の執り成しによって実は生かされる自分を知ります。自分を正当化し、他者を攻撃して誇る自分の愚かさに気づかされ、ただ神の憐れみと赦しによって生かされている自分が見えてきたのでした。

このように見ていくと、一般的な「改心」悪いことをやめて心を入れ替えることと、イエス・キリストにおける「回心」との違いがはっきり見えてきます。確かに両方とも「自分が間違っていました」と認める点は同じです。「心を入れ替えて新しく歩みたい」という思いも同じです。では何が違うのか。一般的な「改心」は「これからは間違えないように頑張ります！」という自分の頑張り、努力の表明であるのに対して、イエス・キリストにおける「回心」（方向転換）は、「自分中心、自分の力に頼ることを辞めます。神さま、それも十字架に愛をあらわされたキリストの愛と赦し、恵みの力によって生かさせてください」という、十字架の主への方向転換なのです。

パウロは後にこう書いています。「あなたがたは、主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストに結ばれて歩みなさい」（コロサイ２・６）。この主イエスに結ばれて歩む道は、日々自分を壊され「新しい人」として造られ続けていく歩みです。一回の回心で完成するわけではない。毎日回心を繰り返していく歩みです。わたしの「こうしたい」「こうすべきだ」ではなく、「主イエスならどう祈られて、どうされるだろうか？」を思い巡らしつつ歩む道です。私たちの言葉や行動が、日々キリストに結ばれ、押し出され、キリストを目指す歩みでありますように。十字架の主によって「殺す世界」から「祈る世界」に捕え移される恵みを生きていきましょう。